

ルソンの碑

岡田, 彰

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Review of law and political sciences / 法学志林

(巻 / Volume)

93

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

141

(終了ページ / End Page)

143

(発行年 / Year)

1995-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003357>

ルソンの碑

岡 田 彰

阿利先生が危篤だとの連絡をうけて病院にかけつけたとき、先生の手は温かかった。その温もりを忘れることはできない。いずれ連絡をうけることになるかと覚悟をしてはいたが、連絡を受けてから病院にかけつけるまでの記憶は伺もない。それからわずか数分後に先生は息をひきとられて、七二年の生涯を閉じられた。

最後に先生のお姿に接したのは、今春三月の日本武道館での法政大学の卒業式であった。奥様とご子息は二階に設けられた卒業生の父母席に座り、遠くから式の進行を静かに見届けていた。車椅子に掛けられた先生が職員の方におされて登壇すると、式場には一瞬の静寂と拍手が交錯した。病をおしてなお総長として最後の職責を果たさんとする先生の責任感とそれを支える強靱な意思に対する礼であった。

先生は卒業式を終えると三月末をもって総長職を辞された。病のためとはいえ任期途中に辞職を余儀なくされたことは、誠にご無念なことであったと推察される。それから僅か一ヵ月足らずの四月二十八日にご逝去された。

東京の下落台の最勝寺での阿利家の葬儀と千日谷会堂での大学葬がすむと、阿利ゼミOBの中からは先生の追想集

を出したいという声が自然の流れになっていた。とはいえ、それほど簡単なことではない。執筆者は、費用は、はたして先生は喜ぶのか、そんな懸念を解消させることになったのが、先生の人柄である。地味で堅実で、しなやかなこと。そして強烈なまでの責任感。そのことが信頼を生みしかもバランスを失することもない。そうした先生との出会いで育まれたこと、その一つの証をというのが阿利ゼミOBのコンセンサスとなっていたのである。そして追想集の準備がはじまった。そのなかで、「もう一人の阿利先生」と出会うことになるのである。

そのきっかけは毎年フィリピンを訪れて戦没者の遺骨収拾を行っている方が撮った一枚の写真である。執筆予定者をリストアップするために、先生宛の一枚の年賀状を頼りに、この方を訪ねた時のことであった。「これが先生が建立された碑ですよ」とさりげなく見せられた写真には、なにやら小さなコンクリートの塊が映っていた。タテ・ヨコ・高さともに五〇センチ程のものであるうか。「阿利莫」と書かれていたので、先生のことだとわかった」と教えられ、碑文については定かではないと、その方から伺った。ご遺族にも決して語られることもなく、われわれ門下生もまた誰一人として、そうした事実はいくく知らされることもなかったのである。

先生が学徒兵としてフィリピンの戦場に送りだされ、生死の境を彷徨ったことは、先生の著『ルソン戦——死の谷』（岩波新書）や断片的なお話のなかで伺っていたが、その生死を分けたマニラから北に二二五キロのボネの地、にわかづくりの戦車撃滅隊の一員としてタコ壺を掘り肉弾戦を展開したその戦場跡に、誰にも語ることなく、ただお一人で碑を建て亡き戦友の霊を弔っていたのである。

かつて『ルソン戦——死の谷』が上梓されたとき、評論家の鶴見俊輔氏が朝日新聞に書評を寄せた。その見出しは「政治学を見返す証言」とあった。鶴見氏は「これを書くために著者に四十二年必要だったことを納得させる」とい

い、それは「ひとりの政治学者によって書かれた記録であり、同時に政治学を見かえすひとりの当事者の証言である」と評している。そして敗戦後、病院船で日本に向かった時の「もう何も欲しくない。こんなこと二度と御免だ」という阿利先生の言葉で結んでいた。

この書評に接したときの先生の何とも言えぬ表情が昨日のことのように浮かぶ。お尋ねしても何ひとつ言葉を発することなかったが。

今、先生の亡きあと、ようやく先生が建立されたルソンの碑に出会うことができ、あらためて先生の胸中の一部に接したような気がするのである。戦場で倒れた仲間を弔うことだけではない。「こどもたちを、教え子たちを、再びこんな目にあわせることはさせないぞ」という阿利莫二先生の毅然とした、そして不退転の決意がルソンの地のさやかな碑と重なるからである。